

被爆 77 周年 原水禁世界大会広島大会・長崎大会に参加して

原水禁帯広市民会議 久保下正哲

2015 年の被爆 70 周年大会に参加して以来 7 年ぶりの参加でした。

今年は初めての核兵器禁止条約締結国会議や、NTP 会議が開催される中、又、ロシアのウクライナ侵攻やそれに伴う核使用を匂わす恫喝など核戦争の危機の高まり、これらを口実とした保守反動勢力の核共有論が公然と主張されるといった国内情勢などが複雑に織りなす状況の中での開催となった原水禁世界大会でした。

北海道団、一人だけの行進

広島大会 1 日目 8 月 4 日の最初の行動は平和公園資料館前から県民総合体育館迄の折り鶴行進でしたが、集合場所の行くと北海道団は誰一人おらず私一人の参加でした。開会総会の会場には北海道団の羽場事務局長が一人待っていて、聞くところによると北海道団は雷雲のために羽田空港から出発出来ず足止めを食っているということでした。私は前日から広島入りをしていたため結局開会総会も一人だけの参加となりました。開会総会には全国から 1200 名の参加が報告されました。久しぶりの対面集会。



中国人強制連行・労働の現場を訪ねて

翌 8 月 5 日はフィールドワーク「安野発電所への中国人強制連行・中国人被爆の歴史を歩く」に参加しました。安野発電所は軍需都市広島に電力を供給する為に建設されていた。戦争末期国内の労働力不足を解消する為、国策によって中国本土から強制連行された中国人労働者に強制労働を強いて建設されたもので、戦後に被害者への謝罪と補償を求める裁判闘争が闘われ、被害者と建設を請け負った西松建設との和解の現場となったところでした。北海道でも炭鉱やダム・トンネルなどの建設現場で多くの中国人や朝鮮人の強制連行と強制労働が行われ、その歴史を掘り起こす活動やその現場で死んだ人々の遺骨を発掘、母国に返す活動が取り組まれていたことや、韓国人従軍慰安婦や徴用工問題で内田雅敏弁護士が解決手法の一つとして「西松建設裁判」の事例を提起していたことなどから以前から現場に行ってみようと思っていました。今回の大会のフィールドワークの一つに安野発電所視察があったので是非にと参加しました。当初参加予定者が少なかった為に中止になるところだったところが現地の皆さんの努力で実施されることになったと聞き、とても感謝するものでした。

現地スタッフ 4 人と参加者 5 人で平和公園資料館前を出発し安野発電所に向かいました。時折雨が降る生憎の天候でしたが、何とか最後まで実施することができました。視察は「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」の川原さんや土屋さん御夫婦らの案内・説明で行われました。当時中国人労働者が収容されていた収容所跡地や建設された導水トンネル・発電所現場を視察しました。最初に案内された安芸太田町坪野には安野発電所があり、その敷地内には「安野中国人受難之碑」が建立されていました。

連行された360人の中国人労働者は劣悪な生活・労働環境の下で強制労働を強いられ、そのうち29名が死亡したなどの実態が克明に説明されました。収容所で事件を起こしたとして16人が逮捕され広島市に移送されたがそのうち広島刑務所に収監された11名と爆心地近くにいた5名が被爆し、その5名は爆死し、刑務所にいた11名は生き残ったということでした。ケガをしたり病気になったりした労働者はひそかに天津迄連れて行かれそこで放置されたということです。日本の敗戦後、中国人労働者は米軍の指令によって中国本土に帰りましたが、その後には差別や内戦などの新たな困難が待ち受けていたということが語られました。



戦後、日本で死んだ中国人労働者の遺骨を中国に返還する運動が全国で立ち上がり、安野発電所にかかわる遺骨も中国に返還された。1992年からその実態について中国本土で調査する活動から現地で被害者の会が立ち上がり、1998年から被害者への賠償と謝罪を求める裁判闘争が始まった。裁判は最終的には最高裁で「請求権」という国と企業を利する口実で敗北することになりましたが、判決で付言された「西松建設を含む関係者において、本件被害者らの被害の救済に向けた努力をすることが期待される」ことがその後の取り組みのきっかけとなり和解につながったということでした。和解の内容は、強制労働が国の意思による歴史的事実であることを認め、西松建設はその歴史的責任を認識し受難者・遺族に謝罪する、和解金を受難者・遺族に支払う、記念碑（碑文は文末の別記のとおり）を建立し遺族を招くなどというものでした。

今、日本政府が韓国人従軍慰安婦、徴用工問題で頑なにその非を認めず解決済みとすることに対し改めて憤りを感じ、その解決の道筋を考えることが必要です。今回のフィールドワークの実施にあたり案内・説明をして頂いた川原さん始め会の皆さんには改めて感謝申し上げます。

（インターネットで「安野発電所」を検索すると詳しい記事が出てきます。）

警備体制の中での式典

被爆当日の8月6日は被爆者慰霊祭・記念式典と原水禁世界大会まとめ総会が行われました。例年会場のすぐ傍で式典を見ることができたのですが、今年は安倍の暗殺の影響か公園の外周の通路以外に入れない態勢がひかれていました。一目でも遠くからでも式典に参加したかった人々は遠くから見守るほかありませんでした。午前8時15分に集まった人は鐘の合図で一斉の黙とうを行いました。また、集まった人の中にはスマホで式典のテレビ中継を見ながら参加していた。私も平和宣言や子どもの誓いをスマホで見聞きしていた。その後広島大会まとめ集会の会場に移動し参加しました。



長崎に高校生平和大使・一万人署名実行委員会の高校生が結集

8月7日は新幹線・在来線特急を乗り継いで長崎市に移動。長崎大会の開会総会に参加。開会行事では、高校生1万人署名の活動がコロナ禍で取り組めなかったが、ビデオリレーとして全国の高校生が参加・発信した取り組みが紹介されました。

翌8月8日、午前は第2分科会「平和と核廃絶―核兵器廃絶と東北アジア情勢」に参加。ロシアによるウクライナ侵攻によって「核使用」の危機感が高まり、一部の反動勢力が核共有論を吹聴しているが、核対核の対立は核戦争の危機を増長するだけで、核廃絶こそがこの危機を無くす唯一の道であることが再度確認されました。



午後は映画会「はだしのゲン」を視聴した。その夜は北海道団の解団式(交流会)に参加。

8月9日、朝に被爆施設の一つ湊中学校を訪れ慰霊碑に献花し、その後県総合体育館まで移動し閉会総会に参加。総会には全国から集まった高校生平和大使や1万人署名実行委員会の高校生が100名以上も参加していた。若い力が確実に広がっていることを確信した。

終了後被爆地公園まで平和行進をする。11時02分被爆時間に参加者全員で黙祷、終了後解散となりました。

(別記)

「安野 中国人受難之碑」碑文

第二次世界大戦末期、日本は労働力不足を補うため、一九四二年の閣議決定により約四万人の中国人を日本各地に強制連行し苦役を強いた。広島県北部では、西松組(現・西松建設)が行った安野発電所建設工事で三六〇人の中国人が苛酷な労役に従事させられ、原爆による被爆死も含め、二九人が異郷で生命を失った。

一九九三年以降、中国人受難者は被害の回復と人間の尊厳の復権を求め、日本の市民運動の協力を得て、西松建設に対して、事実認定と謝罪、後世の教育に資する記念碑の建立、しかるべき補償の三項目を要求した。以後、長期にわたる交渉と裁判を経て、二〇〇九年一〇月二三日に、三六〇人について和解が成立し、双方は新しい地歩を踏み出した。西松建設は、最高裁判決(二〇〇七年)の付言をふまえて、中国人受難者の要求と向き合い、企業としての歴史的責任を認識し、新生西松として生まれ変わる姿勢を明確にしたのである。

太田川上流に位置し、土居から香草・津浪・坪野に至る長い導水トンネルをもつ安野発電所は、今も静かに電気を送りつづけている。こうした歴史を心に刻み、日中両国の子々孫々の友好を願ってこの碑を建立する。

二〇一〇年一〇月二三日

安野・中国人受難者及び遺族

西松建設株式会社

尚、碑の両脇には三百六十名の氏名が刻まれた碑も建立されている。